

稲村三伯と「三伯稲荷神社」その他について

森 納

フランソワ・ハルマの蘭仏辞書を原本として、蘭和辞書、通称ハルマ和解が江戸で完成、ついで刊行されたのは寛政八年（一七九六）といわれている。翻訳に当った蘭学者の中心人物である稲村三伯は鳥取市の生まれである。

『近代日本の医学』二二二頁に、阿知波五郎先生が鳥取市川端三丁目の稲村三伯の生誕地を訪れられ、生誕之碑と略歴を書いた案内板を見た記事をおられる。その記事に「驚いたことには『三伯稲村神社』があったことである」として書かれている。またさらに「医学史点描」三一六頁にも阿知波先生は「川端三丁目の稲村三伯生誕地を訪ねる。近所の人もよく知らない。やっとみつかったのは『三伯稲荷神社』という祠である。三伯が稲荷さんになっているのには驚いた。そのお稲荷さんの入口に等身大よりやや大きい『稲村三伯先生生誕之地』の指標が立っていて、その反対側に、ペンキ塗りの「稲村三伯先生略歴」がかかっている」と述べられている。

しかし地元の者としてこの「三伯稲村神社」、「三伯稲荷神社」は聞いたことがない。そこで過去、現在に存在したことがあるかどうかの確認の調査をした。「稲村三伯生誕之地」の石碑は確かに鳥取市川端三丁目一二〇番地の町内会館の前に建っていて、その町内会館の裏に稲荷神社の小祠があった。その稲荷神社の由来と、三伯との関係について古老を尋ねてまわった。それによると稲荷神社は三伯とはまったく関係なく、昔から（江戸時代末期〜明治初期?）この地にあったという。昭和二十七年四月十七日の鳥取大火の折、川端三丁目一帯も焼失した。その後、この稲荷神社は再建された。

稲村三伯の生誕した家は川端四丁目にある真宗寺の前で、川端三丁目地内にあった。大火後、三伯の顕彰を提唱する人々がいて、三伯生誕之碑を建てるにあたって旧三伯屋敷跡地に土地を求めたが、どうしても得られず、止むを得ず約三〇四〇メートル離れた同じ町内の稲荷神社の前に建てた。どうして「お稲荷さん」の前に三伯生誕之碑を建てたのか。当時の提唱者は既に亡くなっており、近隣の古老は「三伯先生がこの附近にしばしば往診に来ていたためでしょう」との事で、それ以上明らかにすることはできなかった。その後になって稲荷神社と石碑との間に町内会館が建てられたというのである。稲荷神社の名は地元でたんに「お稲荷さん」、「川端三丁目のお稲荷さん」と呼ばれ、京都伏見の稲荷神社から勸請して来たものという。このことは同町内の小谷名香（七十七歳、女）、山根長太郎（七十八歳、男）の二人より尋ね得たものである。

稲村三伯は宝暦八年（一七五八）に鳥取、川端三丁目で、町医松井如水の子として生まれた（松井如水届出）。幼名を龍介といった。この川端三丁目は商家と旅館の多い町であったが、町医松井如水が医業によって生計を営んでいたと思われるが断定できない。しかし後に三伯が退藩の理由となったといわれる弟の大吉が、江戸に出る以前は橋屋長三郎と称して川端三丁目で商売をしていたとされるので、父か或は母の実家がその所にあつたとみてよい。三伯の兄の松井維仙は、そこよりそう遠くない所であるが、当時町はずれであつた行徳の常忍寺前で医業をしていたという。養家の稲村家のあつた場所は不明である。

現在、鳥取市本町一丁目の遷喬小学校の前庭に三伯の顕彰碑があるが、本町一丁目と三伯との関係も明らかでない。ただ昭和三十三年三浦百重鳥取大学学長を会長とする三伯顕彰会が建碑するに当って適当な場所がなく、同じ校区内である小学校の敷地を利用したとされている。

三伯は弟の借財により、享和二年（一八〇二）四月、江戸の鳥取藩邸から脱藩しており、その後には鳥取に戻っていない。稲村家の家名再興が藩より認められたのは六十二年後の文久三年（一八六三年）で、縁故のある井崎家より入籍され

た稲村一二によってである。

脱藩の原因となった弟の借財は多分に三伯の借財によると考えられ、それもその多くはハルマ和解刊行の経費と推察される。三伯は四十俵五人扶持という下級の藩医であり、江戸詰加金があっても実母と娘さだとの江戸の生活は楽でなかった。その上、大槻玄沢の門で蘭学を学び、交遊も多かったとすれば、多くの出費を要したはずである。げんに同僚や後援者から多くの借財を抱えていた(遺書、江戸御留居日記他)。とてもハルマ和解出版の経費が三伯の自費でまかなわれたとは考えられない。むしろ三伯の借財の精算に、弟大吉が江戸に出たと思われ、弟大吉名儀で借財がなされたとみられる。藩としても大吉や三伯により蘭書出版の事実が、その裁判上で公けになって藩に影響が及ぶことを避けたとも推測される。そのため脱藩による家名断絶は当然であるとしても、それ以上の処分、責任追及がなされていない。反対に被護されている形跡さえ見受けられる。例えば三伯の蘭学塾(江戸近辺、のち京都の海上随鷗塾)への鳥取藩医や藩士の入門に寛容であった。

しかしその没後であったとしても三伯を神社に祀ることは到底考えられない。三伯の蘭学発展の功を賞したとしても家名立てが相応のところであったとみるべきである。

なお前述の『医学史点描』三一六頁の二行目の(涌岡義博著『稲村三伯』に拠る)の涌岡義博は涌島義博が正しい。そしてこの涌島義博は先述の「三伯生誕之地」の石碑建立の提唱者の一人であったと考えられる。稲村三伯と稲荷神社を結び付けたのは、阿知波先生を案内した土地不案内の者の説明不足であったのであろう。

参考文献

涌島義博『稲村三伯』久松文庫、昭和三十八年三月

鳥取県『鳥取藩史、絵図』鳥取県立鳥取図書館、昭和四十六年十二月

鳥取県『鳥府志』『鳥取県史』近世資料、鳥取県、昭和四十九年二月

森納『因伯の医師たも』昭和五十四年八月
阿知波五郎『近代日本の医学』昭和五十七年六月
阿知波五郎『医学史点描』昭和六一年八月

(鳥取県岩美郡國府町)

Of Inamura-Sanpaku and the "Sanpaku Inari Shrine"

by Osamu MORI

Dr. Goro Achiwa's writings state that the "Sanpaku Inari shrine" or "Sanpaku Inamura shrine" was built in Tottori City. Inamura Sanpaku was born at Kawabata 3 chome in Tottori City. In fact, there is an "Inari shrine" in this place, but this shrine has no relation to Inamura Sanpaku. However, near this place is the monument erected at Sanpaku's birth place.

Inamura Sanpaku with some freidnds published a Dutch-Japanese Dictionary in 1796. As it happened, Sanpaku ran into debt over the publishing costs. Consequently, his brother Daikichi made efforts to pay off the Sanpaku's debt, but he could not pay off the money and Daikichi and Sanpaku were taken to court.